

「伝統・文化」体感型ワークショップ 【研修編③】

「能の謡」の魅力を味わう（受講者 17 名）

講 師： 梅若 基徳

実施日： 平成 22 年 7 月 29 日(木)

=====

■目 的：・ 伝統や文化を尊重する意義を知る。

- ・ 能楽の歴史や内容等、指導上必要な事項を学ぶ。
- ・ 「能の謡」の体験を通じて、「能の謡」を実演できるようになる。
- ・ 現場の授業をシミュレートし、授業における「能の謡」の指導法を学ぶ。

■期待される効果：

- ・ 学校における伝統音楽の指導の工夫改善を図る契機となる。
- ・ 「能の謡」の演奏技能や知識をより深め、技術力、指導力の向上が期待できる。
- ・ 「能の謡」の発声の特徴や表現の豊かさを体験し、教員が和楽器や伝統・文化のよさを感じ取るとともに学校や児童・生徒の実態に応じた授業展開を計画・実施できる力を身に付ける。

■準備教材・設備等：

シート（土足厳禁の会場）、白足袋又は白ソックス

■研修の流れ（@6 時間×1 日）

「能楽」についての説明



能・謡の発声演習（強吟・弱吟）



摺り足体験



謡「高砂」の演習



能面と扇、能装束の話と能面付けの体験



謡「高砂」「千秋楽」の演習



仕舞「狸々」の演習

■Advice points

- ・ ワークショップ体験後に「能」観劇をすると、能楽への理解がより広がる。

■講師の感想（要約）

能楽は日本で生まれ、現在まで継承されてきた伝統芸能でありながら、教育現場では、能楽を子どもたちに教えることができる先生が少ないことを実感した。謡の演習では大きな声を出して演習でき、難しい節を習得してもらえることができた。今後、授業における能の指導テキストが必要であると感じた。

■受講者の感想（抜粋・要約）

- ・ 伝統・文化に親しむ機会はなかなかない。五感で感じる実体験をして貴重な体験となった。
- ・ 専門的な技能なので専門家との連携を図ることが有効だと感じた。
- ・ 子どもたちにとって能は難しいものと感じていたが、申楽や初心の話は子どもが興味を持ちやすい話材である。
- ・ 謡は楽器より、初心者でも自分なりの表現がしやすい。声を出すことの恥ずかしさを乗り越える必要がある。謡の抑揚は難しいが、特徴を楽しむことを伝えたい。
- ・ 日本古来の文化は、日本人の感性に合ったものが発展してきたものなので、子どもたちも抵抗なく受け入れられるように指導したい。
- ・ 感動した体験は、より熱意をもって生徒に伝えられるエネルギー源になる。
- ・ 伝統・文化の基礎知識・技術・技能が乏しいので、もっと勉強して指導できるようになりたい。
- ・ 海外では、自国の伝統・文化を学習してから、ある年齢で興味のあるものを選択するシステムができているが、日本はそれが欠けていることを痛感した。

